

「&」あなたと私は同じ、ユニティ。ひとつになるうぜというラスタファリズムの思想から来る合言葉です。素敵な輝きは誰にでも、自分の中にもあることに気づこう！



20才から猟師に

「おじいさんが猟師だったので、子どもの頃おじいさんについて荷物持ちで手伝ってたんです。自分で狩猟を始めたのは20才の時からです。狐はワナで捕らえて槍でしとめます。鉄砲の免許は取ったんですけど、自分の力を超えすぎて怖いから使ってません。ワナも免許があって、今はくりワナと箱ワナくらいしか許可されてないです。動物を獲って食べるというのは、やりとりのうちの1つです。美しい野生動物との様々なやりとりが目的でした。

蜂やイヌワシ鹿や猪、モグラの仕事。熊や狼が森とどんな仕事をしているか。そして彼らから何を学び僕はどういう関係を築けるのか。」

オオカミ犬ヨイク

龍太郎さんはヨイクという名前の、まだ1才ちょっとのオオカミ犬を猟のパートナーにしている。ヨイクの親は北極オオカミとアラスカオオカミの血が99%入っているようで、うなったり遠吠えするだけで未だにワンと吠えない。声を出すと自分の場所がバレるからという警戒心があるみたいだという。今1才4ヶ月くらいだが体重が50kgあるそうだ。ヨイクの意味は：

「僕が尊敬する北極のサーメという民族がいるんですが、彼らは風の音や狼の遠吠えとか自然の模倣を歌っていて、その歌のことをヨイクって言うんです。

狼と人はどんな関係を築けるでしょうか。今は娘と姉弟の様に育っています。」

「以前は狐をしながら肉を売ってたんです。精肉処



シャーマニックドラムや多面体をつくる若手猟師

赤田 龍太郎 さん

太一やでドラムサークルのリーダーをしているのは何度か見た事があり、またオオカミ犬を連れてきてたのももっと知りたいと思った。多面体づくりの仕事やWSもしてるという。中国山地の山里に住み、20才の時から猟師をしている龍太郎さんの家を訪ね、お話を聞かせてもらった。(あ)

理場に行って、自分が捕った動物とか他の人が捕ったものも駆除という状態にしておくのはいやだったから、それを精肉して販売してたんですけど、皮を生かしてなかったんです。それで悩みつつ、自分の集中力のために多面体を作ってたんですけど、自分でばらばらだと思っていた幾何学と狐が、尾崎さんと出会ったことで統合されたんです。

それまでも自分でなめしたりしてたんですけど、どうもいなくて、でも化学薬品とか持続出来ないものは使いたくないからどうしたらいいかなと思ってたときに、友だちから『淡路島で海水だけで皮をなめして太鼓を作ってる人がいる。そして彼はいまを探してる』と聞いて、『それは僕のことだ』って思ったんです(笑)。

それはナフシャというお店もやっていた尾崎さんという人で、出会って最初に「縄文スピリットって何だと思う？」と聞かれて、縄文のことなんて一度も考えたことなかったの、なかなかショックでした(笑)。彼は一度死にかけてから、人が仲良くなるには縄文文化しかないと思うおっしゃってました。」

捕った獲物でドラムをつくる

「僕がとってるのはアナグマ、イノシシ、鹿ですが、太鼓するには向き不向きがあって、野生動物では鹿だけです。

アフリカのヤギの太鼓や、インディアンのパッファローの太鼓の音を聴いていると、日本の気候の中では皮が潜在的な力を出せていない事に気がきました。その土地で育った動物の皮の響きは、その土地でいちばん響くんだらうなと。

2003年頃から鹿やイノシシが爆発的に増えていて、自然界で突出して増えていくものは、植物でも動物でも「俺を使ってくれ」と言ってるような気がして、それで鹿の皮を活かしたいと思うようになったんです。」

——シャーマニックドラムというのはもともとどういうもの？

「尾崎さんは「縄文の音」を強く意識していました。多くの先住民は太鼓を楽器と呼びません。それは乗り物と呼ばれ、撥(マレット)は櫂(オール)と呼ばれます。鳴り物で乗り物なんです。生まれる以前から胎内で聴いていて、生まれてからもずっと鳴っているイノチにとって大切な音。鼓動が不正脈なら、自分のリズムではなく病の原因となります。誰かにノセられるのではなく。人をノセるのでもない。自ずとノる。自らノる。自分の脈を整えリズムを取り戻す意味合いが強いです。」

多面体への興味

龍太郎さんは子どものころから動物を観察したり動物の巣にすごく興味があって、モグラだとかアナグマ、それに蜂だとかクモの巣作りを1

日かけて観察したり。すごくうまく幾何学を使ってるなと。そういうことに興味が出たのは高校生くらいからで、自分の巣作りをしていたという。そして尾崎さんと出会



うことで、猟師として得た動物の皮を生かすことができるようになったと同時に、ドラムづくりは幾何学とも結びついた。また猟師をしてるだけでは出会わなかったような人達と出会うようになったそうだ。

「多面体の造形や縄文土器の複製品を触っていると本を読んでいる様な感覚になります。"渦がこう来てここで繋がって対流する"触れながら、角度を変えてみたり転がしてみたりしながら、多面体の中にも自然と同じようにリズムがあり、特定の周波数の様なものを見出すことが出来ます。そして中心の整ったカタチになると響きを持つていることに気がきます。カタチには構造があり、それ自体が固有の響きを発しています。または響きがカタチを決めているとも言えます。太鼓はその単純な構造故にドラムヘッドのカタチによって、響きを大きく変えます。例えば、真円に近いものや八角形の太鼓は音を遠くへ飛ばす様な突き抜ける音になりやすく、一番はじめに作った7角形の太鼓や15角形、楕円形の太鼓はその場の振動数を上昇させる複雑な倍音が特徴で、音楽というよりもその一音の響きに興味を掻き立てられました。」

現在ではドームづくりを仕事として頼まれて作ることもあるそうだ。

「圧が外からかかればかかるほど強くなります。1カ所にかかった重さを全体で支えるから。それは僕らの体内にあるタンパク質の構造と同じです。多面体のドームはたいてい上から5/8くらいで建てられることが多いんですが、それは最初から崩れるので、崩れにくいんです。横になった人は倒せないのと同じです。」



↑整備中の家の北側の壁には背丈以上ある大きな多面体の窓が開いており、そこから入ると大きな火を焚くスペースもある。

最近仕事で頼まれて兵庫県西脇市にある播州織りの工場に5.5m×6mくらいの温室を作った。→